

こんにちは♪ 新入生ははじめまして♪ 図書館司書の“せーやさん”です。通り名は、“図書館の天使”、“本のソムリエ”など数知れず。本が何より好き！というあなたはもちろん、本なんて全然読まないという君の心にも届くような本を、じゃんじゃん紹介していきたくと思っています。よろしくね。図書館は知識を得るための場所、学習のための場所ですが、それだけじゃもったいない。夢を見たり、心が癒されたり、居心地よかったり。君たち一人一人に図書館が意味のある場所になるよう、がんばります。では、あいさつがわりに、昨年度の超オススメ本を紹介します！ どれもハズレなしだよ。

## 昨年度のオススメ本！

### 『同志少女よ、敵を撃て』 あいさかとうま 逢坂冬馬

デビュー作が直木賞候補となり、本屋大賞にもノミネート！「女性もまた、能力さえあれば戦地で戦うのだ。それを選んだのが自分たちだ」。女性のみで構成された狙撃兵部隊。スナイパーありえない設定のように思われますが、第二次世界大戦の独ソ戦においては、百万人ものソ連の女性が従軍し、多くが自ら兵士として戦ったのです。その中の一人であろう女性狙撃兵の物語。彼女がいかにして百人の命を奪う狙撃手となったか。モスクワ近郊の農村で暮らす、大学進学を控えた16歳の少女・セラフィマの幸福な日常が突然奪われる。ドイツ軍に急襲され、母親ばかりか村人が皆殺しにされたのだ。現れた赤軍によって間髪セラフィマは救われるが、リーダーらしき女性兵士は「戦いたいのか、死にたいのか」と尋ねてセラフィマの頬を張るのだった。そして、母の遺体と思い出の我が家を燃やしてしまう。かたき敵を討つ。母を殺したドイツ兵と、母と村のすべてを焼きつくした女性兵士に。女性兵士はイリーナといい、セラフィマをある場所へと連れて行った。そこは、女性だけの狙撃兵訓練学校。そこには、セラフィマと同じように家族や故郷をナチス・ドイツに奪われた少女たちがいた…。難しいテーマを扱っていますが、最初から最後までまったく退屈させることのないバツグンに面白いエンターテイメント作品になっているのが、すばらしい！タイトルの撃つべき敵とは、単純につくきドイツ兵を指しているのではありません。衝撃のラスト。「敵を撃て」の敵とは、いったい何者なののでしょうか。「物語の兵士は、必ず男の姿をしていた」。

## 『雷神』『N』 道尾秀介

「パパのお花、おっきくなるよ」「お花って、お日さまにあてたほうがおっきくなるんだよ」。4歳の娘・夕見が、父・幸人がベランダで育てているアザミがもっと大きくなるように、高いところに乗った。その植木鉢は落下し、その下を走っていた軽自動車のフロントガラスを直撃し、驚いた老人ドライバーは誤ってアクセルを踏み込んでしまい、背後から娘の母親を跳ね飛ばした。「このことを、娘の耳に入れずに暮らさせてやることはできないでしょうか」。ずっと事故の真実が娘の耳に入らないよう、マンションを、あの場所を離れて、15年ひっそりと暮らしてきた。何も知らず大きくなった幼い夕美は、大学生になっていた。父の遺した和食店を継ぎ、娘と二人幸福に暮らしていた幸人に、突然そのすべてをぶち壊すような電話がかかってくる。「金を都合してもらいたくてね」「秘密を知ってるんだ」。店にまで現れた脅迫者から娘を守るため、幸人は新潟の羽田上村へと娘と姉とともに赴く。そこは幸人と姉の生まれ故郷であり、事件で母を亡くし、父の犯した「罪」のために逃げ出してきた場所だった。30年前に、幸人と姉はそこで雷に打たれていた…。愛する人のためにしたことが、その人のためにならないだけではなく、その人を悲劇へと追い込んでしまうという不条理。そのようなことが許されてしまうこの世界に、神などいない。『龍神の雨』『風神の手』と「神三部」をなすこの作品で到達した、著者の結論です。もう1冊！本という形態の可能性に挑戦した、720通りの読み方ができる挑戦作『N』もすばらしかったです！

## 『旅する小舟』 ペーター・ヴァン・デン・エンデ

「『目が釘付けになる』ということは本当にあるのだと私は知った」（岸本佐知子）。ベルギー発の文字のない真っ黒な絵本。黒い部分も途方もない時間をかけてペン1本で描き込まれているのです。ぜひとも現物を見ていただきたい！そして感動してもらいたい、とんでもない絵本です！作者とおぼしき青年が、「月のひと」の力を借りて、一枚の大きな紙から舟を織りあげる。＜探索号＞から飛び出したそれは、大洋から比べればちっぽけな小舟に過ぎない。さまざまな生きものたち（実在するものも実在しないものも！）と出会いながら、小舟はマングローブの南洋を抜け、オーロラたなびく南極に辿り着き、工業地帯を越えると海底に沈んでしまうのだが、潜水艦に助けられて…。北太平洋からアントワープまでの世界半周のめくるめく冒険！最後のページを閉じたとき、あなたは「ものすごいものを見た」という感動に震えることでしょうか！何度でも眺めたくなる本！

### 『ペッパーズ・ゴースト』 伊坂幸太郎

「もうおしまいだ」が口癖で心配性で悲観的なロシアンブルと、いつもご機嫌で楽観的で軽快なアメショー。まったく正反対の性格の二人はネコジゴハンターだ。ねこを連れてきては虐待を行いネット上で実況していた<猫ゴロシ>の支援者の集まり「猫を地獄に送る会」通称<ネコジゴ>のメンバーを探し出しては、ねこが与えられたのと同等の拷問まがいのひどい目に遭わせていくのがその役割である。生徒が創作したそんなネコジゴハンターが活躍する小説を読ませられている中学校教師の檀<sup>だん</sup>には、ある特殊能力があった。少しだけ未来を観ることができるのである。彼は<先行上映>と呼んでいるのだが、「飛沫感染」をさせられた相手の翌日に起こるいちばん重要な場面が見えるのだ。ある日の放課後に呼びつけた生徒から「感染」させられた檀は、その生徒が新幹線の大事故に遭う場面を<先行上映>で観たため、迷ったあげく生徒に乗る新幹線を変更するよう告げる。果たして事故は起き、新幹線に乗る時間をずらした生徒は救われた。ところが、それをきっかけに会うことになった彼の父親が失踪してしまう。父親は5年前のテロ事件の被害者遺族の会のメンバーだった…。「うつむく人に前を向かせてくれる」小説！

### 『本心』 平野啓一郎

「――母を作ってほしいんです」。舞台は近未来の日本。シングルマザーで自分を育ててくれた、唯一の家族である母親を喪った29歳の朔也<sup>さくや</sup>は、その悲しみを乗り越えることができず、VF（ヴァーチャル・フィギュア）で母を再生させるという選択をした。VFとは、最先端のAIとVRの技術を駆使して仮想空間に作られた、本人と瓜二つで本人らしくふるまい本人らしく会話をすることができる人工の人間のことだ。母はこの時代には合法化されている「自由死」を望んでいた。自由死とは、人生に満足した人に与えられる安楽死のことだ。朔也は、他人に自分の体を貸して命令通りに動く「リアル・アバター」という仕事をしていて、母に雇われて伊豆の河津七滝<sup>かわづななだる</sup>に行ってみせたときに、母は朔也の仕事を理解し満足したことを示したあとで、「もう十分」だと自由死の希望を告げたのだった。「今はすごく幸せだから、このまま死にたい」「朔也と一緒にいるときがいちばん幸せだから、朔也に看取られて死にたい」。もちろん朔也は猛反対して思いとどませたのだが、結局母は彼が不在のときに事故死してしまったのだった。母の残したすべてを学習したVFは、母の「本心」を語り出してくれるのではないかとえそれが、僕を一層深く傷つけることになるとしても。

### 『ひきなみ』 <sup>ちはや あかね</sup> 千早 茜

「ひきなみ」とは引き波、船が通った跡の白い波の道のこと。今作に登場する真以は、船の最後尾からそれを眺めるのが大好きでした。「私にとって真以は光だったよ。ずっと、誰よりきれいだった。真以がいてくれてよかった」。舞台は瀬戸内海の小さな島。両親の都合で、葉は小学校最後の年にこの島で祖母と祖父と3人で暮らすことになった。初めての寄り合いで東京から来た彼女を島の子たちは遠巻きに眺め、島ではまだ珍しかった携帯電話を男の子に奪われてしまう。ただでさえ不安なのに気が気でない葉を救ってくれたのが真以だった。テーブルの上をずっと走り、男の子を蹴飛ばして携帯電話を奪い返してくれたのだ。そんな真以に葉は惹かれ、皆から「関わらんほうがええ」と言われたが、同じクラスになった彼女と親しくなる。真以は葉たちとは別の島で、祖父と二人きりで暮らしていた。その島で葉と真以は、逃亡してきた脱獄犯の男と出会う。しばらくして、真以は葉には何も告げずに彼といっしょに姿を消してしまうのだった…。裏切られたという思いを胸に東京に戻り、やがて大手飲料メーカーに就職した葉だが、男性上司の執拗なハラメントに限界を迎えていた。そんなとき、あえて捜そうとしなかった真以の姿を見つけて…。「誰かと会いたいと思ったのも、誰かの幸福に安堵したのも、ずいぶん久しぶりのことだった」。

### 『正欲』 <sup>せいよく</sup> 朝井リョウ

「幸せの形は人それぞれ。多様性の時代。自分に正直に生きよう。そう言えるのは、本当の自分を明かしたところで、排除されない人たちだけだ」。たいへんな問題作！ フツーに異性を愛することができないLGBTQ、マイノリティの人たちを認めようという風に時代は変わりましたが、そのマイノリティのなかにすら含まれない特殊な欲望（異常性癖）を持つ人を主人公にした作品です。タイトルは、「正しい性欲」ということでしょうか？ この作品の登場人物は、水に興奮します。異性はおろか人ですらなく、噴出している水を見ると性的な欲望を覚えるのでした。そのことは誰にも打ち明けられないし、自分が気持ち悪いことは誰よりも分かっています。そんな世界と線を引きひとりで生き抜いてきた存在が、もし「同志」を持つことができたなら。「本当に繋がりたい相手とは、あんな場所で堂々と手を挙げて存在を確認し合えるような人ではない。誰にも見られていない場所で、こっそり落ち合うしかない誰かなのだ」。

————— 図書館の天使がキミを歓迎します♪ では、図書館で会おうね！